

## 子どもの生活世界における乗り物

—絵本にみる他者としての交通を考える—

延藤安弘\*

本稿のねらいは、事物を越えて、他者としての交通と子どもの間に共感がひろがる状況を伝える絵本の分析を通して、生活を意味づける織物としての生活世界の視点から、子どもと交通のかかわりの多面性を考察することにある。生活世界と交通絵本の接点をなす課題として、危険と安全への「気づき」を促すこと、世界の変容は自己変身をもたらすこと、二つの自由をもたらす自転車、トラブルをエネルギーにする態度、等について考察している。

## Vehicles in the Children's Life-World

—Transportation as Otherness in Picture Books—

Yasuhiro ENDOH\*

The aim of this paper is to adopt a multilateral view of children in relation to transportation from the viewpoint of the environment which influences their lifestyles. The paper analyzes pictorial books which depict situations where children can empathize with transportation as otherness transcending the material world. The issues of promoting "awareness of danger and safety", self-transformation through the change of the environment, dual freedom brought by bicycles, and attitudes to change trouble into positive power are discussed. These issues are seen as common point with life world and transportation.

### 1. 生活世界と交通絵本

子どもは交通社会にどのように参加していくのであろうか。子どもは、移動手段としての交通の物的環境や、規範的ルールとしての社会的環境の中に生きているだけではない。交通生活の中での具体的でかつ個別的な経験を通して、生きる意味を多様に発見・吸引する一つの意味的な世界にも生きている。

そこで、子どもの交通生活における「生を彩り、生活を意味づける意味の織物」を、「生活世界」<sup>1)</sup>と呼ぶが、その生活世界という切口から子どもと交通のかかわりを考えてみよう。

子どもの日常生活での交通とのかかわりにおける「経験」や「意識」の流れの中に、生活世界の現実性を見ることが出来る。

生活世界の視点から子どもと交通のかかわりを見るということは、「事物」としての乗り物だけでなく、「他者」としての乗り物という見方をもたらす。「事物ではなく他者を知覚する場合に生じる特有の心的経験が愛である。」<sup>2)</sup>愛の原理は「共感」である。子どもが交通生活、交通社会に共感を寄せるのは、どのような両者の関係が生成される場合なのだろうか。

ところで、本稿では、事物を越えて、他者としての交通と子どもの間に共感がひろがる状況を考察する手がかりを、絵本の中に求めてみたいと思う。

絵本は、子どもに、生活空間に対する想像力の翼をひろげてくれる役割を果たすものである<sup>3)</sup>。絵本は自ら読むだけでなく、親や大人とのふれあいを通

\*名城大学理工学部教授  
Professor, Faculty of Science and Engineering,  
Meijo University  
原稿受理 1996年9月11日

して聴くという体験をもたらす。

子どもにとって絵本とは事物としての本であるだけでなく、他者との心と心の交通をもたらす体験でもある。この点においても絵本には、子どもと交通の間の多様な共感の世界をひらいていくポテンシャルが潜んでいるといえよう。

絵本に見る交通については、すでに前稿<sup>4)</sup>で述べた。そこでは世界の絵本の中に描かれた交通を読み取り、その歴史的、文化的コンテクストの諸相をおさえ、交通システム・交通生活の有り様を解説した。ここでは、それとの重複はさけ、別の交通絵本（直接的に主要な交通生活を取り上げているものから、間接的、部分的な扱いに至るまで、幅広い範囲にわたる）をとりあげ、モノ、ヒト、コト、ココロへのかかわりの視点から、子どもと交通の生活世界のリアリティの多元性を明らかにしたい。

ここでいう子どもと交通の生活世界のリアリティの多元性とは、平板な単一の世界ではなく、複雑な現実性の総合である。即ちそれは、現実と夢想、日常と非日常、理性と情念の複雑な織物として、虚と実の交錯として現出することとなる<sup>5)</sup>。絵本はまさに、カテゴリー化された見方の逸脱に充たされた場である。

そこで、早速、子どもと交通のかかわりの生き生きとした世界を取り上げている絵本の中に分け入ってみよう。

## 2. 生活世界の地図づくり

### 2-1 「ちずのえほん」

ひとりの子どものモノ、ヒト、コト、ココロの相互全体関連としての生活世界を、地図に表現した絵本がある。“My Map Book”（『ちずのえほん』）<sup>6)</sup>は、イタリー生まれ、ロンドン暮らしの、本と地図とボタンと犬とお月さまの好きな小さな女の子（サラ・ファネリ）によって描かれた（Fig.1）。

まず、「タカラ地図」。タカラ箱、化物、森、木、野原、林、川、橋、池、城……と、現実と夢想が浸透した内容。

「寝室地図」は、自分のベッドとスリッパ、姉のベッドとトムといううさぎのお人形、(魔法の)カーペット、自分と妹の机、おもちゃ箱、窓、窓台の上の花とサボテン等の、平面図的表現。

「家族地図」は、両親、私と妹、犬のプブ、父方の祖父母、おじさん、おばさん、いとこたち、母方の祖父母の全身像が描かれた家系図。

「1日地図」は、朝起きて、朝食。スクールバスで学校へ行き、午前中は学校。学校には、自転車で来る子、歩いて来る子もある。昼食、そして、遊び場で大好きなゲームをした後に帰宅。夕食、お話タイムの後に夢の中に……を時間帯別に表現。

「ご近所地図」は、自分の家（一戸建）、隣に面している遊び場、川と橋の間をぬう道路。路上は、車、犬の散歩をしている家族、隣人たち。木とそこを住み家としている小鳥など。隣の家の屋根の上にはネコ。身近な環境を、建築や道路や車などのモノ（ハード）だけでなくヒトの振る舞いや生き物の生息状況（ソフト）との総合としてとらえている。

「おなか地図」「色地図」「私の犬地図」「私の顔地図」もおもしろいが「心地図」は傑作。心の中心を占めているのは、父母、妹、祖父母、犬といった家族である。そして友だち。家族と輝くお日さまの間を特別に赤でチョコレートを表しているとともに、ステキな驚き——それは、車に乗ってどこかに行くこと、おいしいお菓子を食ふこと。車への共感が子どもの心のすみっこに芽生えていることがわかる。「道路地図」もある（Fig.2／グラビア1頁）。横断歩道を渡るときには、渡る前に必ず左右を見ることが強調されている。信号は、赤＝止まる、橙＝待つ、緑＝歩く、と明示されている。日常的にこれらが常識化していることをうかがわせる。

最後に、「海辺地図」。砂浜には、キャビン、デッキチェア、ビーチパラソル、見張りのおじさん、そして、立派な砂の城（旗がひるがえっている）。海には、自分のライフジャケット、ブイ、帆船、ボート。魚たちの群れは「魚の学校」と記されている。

表紙カバーのそでは、「この地図の中には何台自転車がありますか?」「何匹の犬を見つけられま

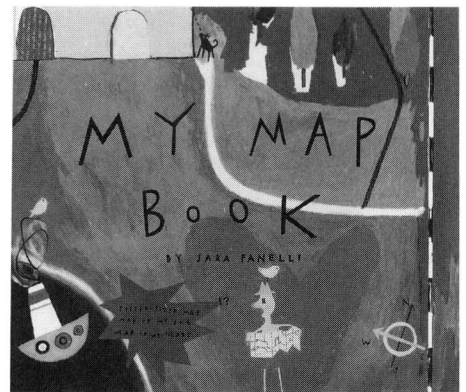


Fig.1 「ちずのえほん」 宝物の地図から心の地図まで

すか?」「何本の木が育っていますか?」の問いかけがある。子どもの生活世界の中では、自転車、生きもの、樹木がよきパートナーとして存在しているときが、子どもにとって居心地のよい環境であることを示唆している。

## 2-2 子どもと他者を結ぶ交通

このように、この絵本は、子どもの生活世界の成り立ちの特徴を二つの側面から明らかにしている。

第一にそれは、「私」を中心にして遠近法的に組み立てられているとともに、子どもの中に周りの世界が取り込まれていることを示している。

第二にそれは、日常と非日常、現実と空想、ハードとソフトが融合したものであることを示し得ている。

乗り物は、子どもと他者(祖父母やよその場所など)を結ぶとともに、日常と非日常、現実と空想等をも結びあわせる媒介的役割を果たしていることがわかる。

## 3. 危険と安全への「気づき」を促す

先に取り上げた絵本の中で、子どもは信号の仕組みや横断歩道を渡る作法について身につけていることが描かれていた。そうした交通安全についての学習を促す絵本を取り上げてみよう。

### 3-1 「道をわたりたいな」

“I Want to Cross the Road” (『道をわたりたいな』Fig.3/グラビア1頁)<sup>7)</sup>は、イギリスの「王立交通事故防止協会」の協力によって作られた交通安全教育用の小さな「知識絵本」である。わかりやすい明快なイラストを添えられたこのテキストは、就学前の子どものために、道路上での遊びと道路を渡る際の安全性の配慮について簡潔にふれている。子どもへの問いかけと答えから成りたっており、安全行動を実践してほしいという願いがこめられた構成になっている。

例えば、子どもが母親に「外で遊びたいな」と言うと、彼女は「ダメよ。道路では絶対に遊んではダメよ」と言う。男の子はすかさず、「なぜ」ときく(Fig.4)。頁をくると「なぜなら、車もバスもバンもローリーもバイクも、みんな乗り物と呼ばれるも

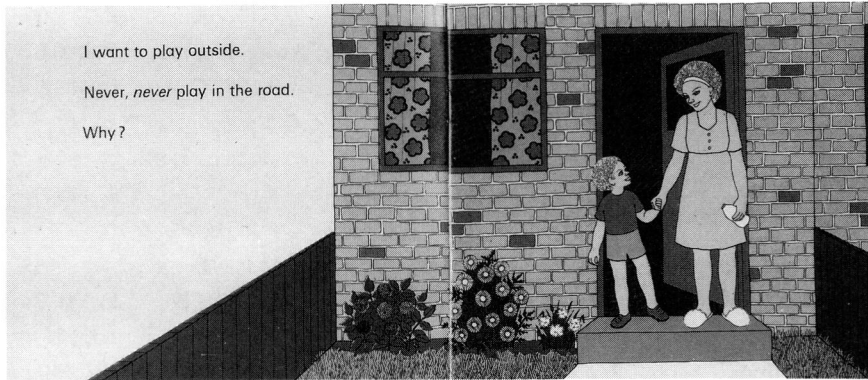


Fig.4 「道をわたりたいな」より「外で遊びたいな」「道路で遊んではダメよ」「なぜ?」

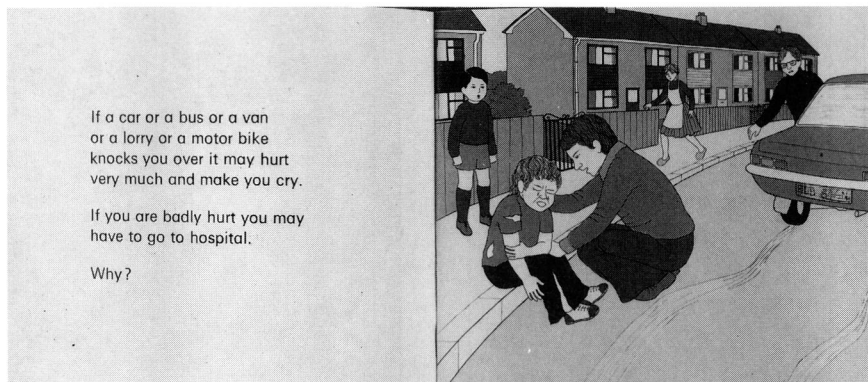


Fig.5 「道をわたりたいな」より「もし車にぶつけられてけがをしたら病院に行くことになるのよ」「なぜ?」

のは、道路を走っていて、あなたをノックダウンさせるからよ」と続く。そして「もし乗り物にぶつかると、怪我をして泣くことになるのよ。もし、怪我がひどいと、病院に入らないといけなくなるのよ」と言い、事故現場が出てくる (Fig.5)。

加えて、道路を渡る時には安全な場所 (地下道、歩道橋、ゼブラ・クロッシング、ペリカン・クロッシング、交通街灯、交通安全おばさんのいるところ等) をすすめている。

### 3-2 『はじめてのおつかい』

幼い子どもは、身近な環境で乗り物と出会うとき、大人が想像する以上に恐怖心を感じている。五つになったみいちゃんが「はじめてのおつかい」<sup>8)</sup> (Fig.6) に行くときに会った自転車には、彼女は「どきんとして、へいにべたっとくつつ」いた (Fig.7)。同じ作者による別の絵本でも、同様の表現のシーンがある。

### 3-3 絵本が触発する想像力

子どもは日常生活の経験を通して、乗り物との出会いによる不安、危険感を覚えるだけではなく、「物語絵本」の中でのシーンを通じて想像力を媒介にしてそれを感じることがある。



Fig.6 『はじめてのおつかい』 五つのみいちゃんの体験

例えば、Fig.8 (グラビア1頁) は、子猫の冒険の旅の絵本の中のひとつまでである<sup>9)</sup>。タンクローリーに轢かれそうになっている子猫は、毛がたつほどの恐怖感を覚えている。絵本の中の主人公と一体感をもってこれに見入る子どもは、スピードをあげて走る巨大な乗り物への警戒心を高めていく。

子どもは、現実の生活の中での経験を通して、また知識絵本や物語絵本の中のシーンを通じて、自分と乗り物のかかわりの安全性について「気づき」を高めていく。「気づき」とは、生活の中での身体を媒介とした、あるいは絵本に触発された想像力を媒介とした「洞察」のことをいう。

交通安全教育のために有効な絵本は、表層的なものではなく、子どもの想像力の深層に影響を与えるような、即ち、絵本の中のイメージーション表現を媒介とした「気づき」を引き出してくれるものでありたい。真の「気づき」とは、受身的に見たり聴いたりするだけではなく、交通参加者としての子ども自らが、安全性への身体行動をとる直感を意識化していく作業をもたらすことである。

## 4. 世界の変容は自己変身をもたらす

乗り物は、子どもにとっての世界を変容させる。窓の外の景色を楽しむのは、異なった世界が子どもの中に取り込まれていく、即ち、自己変身にワクワクすることである。

### 4-1 『夜のドライブ』

“Night Ride” (『夜のドライブ』次頁Fig.9)<sup>10)</sup> は、親子の夜のドライブを描いている。

ここには、お母さんといっしょに車に乗ることのあたたかさや安心感が漂っている。小さな男の子ピリーは、夜の神秘さとおもしろさをたくさん発見する。日中みる世界の形も音もすっかり変化する。道が曲がる場所ではライトに照らされて、木はお化



Fig.7 『はじめてのおつかい』より、走ってくる自転車に「どきんとして、へいにべたっとくつついた」

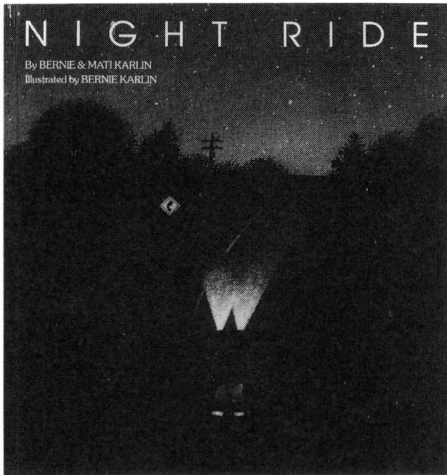


Fig.9 『夜のドライブ』 日中の世界の形も音もすっかり変化する

けのように見える (Fig.10/グラビア1頁)。

流れ星が暗闇の空を切り裂くように走る。「ピリ一、早く、お願いごとを」と母が言う。

夕暮れどきから、新しい一日が始まろうとする明け方までの間に、車の進行とともに、頁ごとに、景色が移り変わる。

#### 4-2 『ワクワク夜の絵本』

劇的なパノラマ表現で、夜の交通空間のワクワクする世界を描いているもう1冊の絵本として、“The Most Amazing Night Book” (『ワクワク夜の絵本』 Fig.11/グラビア2頁)<sup>11)</sup>がある。副題にPacked with surprise! とあるように、仕掛け絵本である。

例えば、都心 (Fig.12/グラビア2頁)。バスの中での「起きなさいよ。ここはあなたがおるとこじゃないの?」という声。バスの扉をあけると、なんと、犬連れの女の人が降りてくる。バスの手前の路上のマンホールのふたをあけるとネズミたち。高架鉄道の中央駅では「10時発の列車がただ今出発します」のアナウンス。ダンスホールの入り口では「そんな服装では入場お断わり」と言われているジーパン姿の若いカップル。レストランでは「ウェイター、ぼくのスープにハエが入ってるぞ!」の声。市街地住宅の中では赤ん坊をあやす母親。その前をボリュームの大きい音楽をならして駆け抜ける車……。

飛行場とその周辺。丘陵地帯の住宅地。川べりのお化け屋敷(?)。海辺に近い教会のある住宅地。これらのどの頁でも、つまみを引っ張ったり、リングを回す等の仕掛けによって、鉄道、道路と車、船、

飛行機等の乗り物の意外性とおもしろさが引き立てられている。

最後には、列車が海浜に着く。「忘れ物しないでね」「海のにおいがするわね」の声。大きな船で着いた乗客には「船酔い(シーシック)した」人もあれば「ホームシックにかかったわ」と言う人もある。

この絵本は、移動している乗り物の中での出来事と、移動する場所で起こっている出来事を同時に見ることができるように表現されている。

#### 4-3 『トラック』

1台のトラックが、夜中、数百マイルにもわたって移動する途中での出来事が鮮やかに描かれている絵本としては、“Truck” (『トラック』 Fig.13/グラビア2頁)<sup>12)</sup>がある。輪郭くっきりと描かれたスーパーハイウェイ、24時間営業のレストラン、交通標識、道路景観への関心が、見る子どもの心の中に高められていく。

#### 4-4 『サンフランシスコ』

サンフランシスコの都市の生き生きとした表情をとらえた絵本がある (Fig.14/グラビア2頁)<sup>13)</sup>。ケーブルカーが街の中をゆったりと走る (Fig.15/グラビア2頁)。サンフランシスコのケーブルカーは、1873年にA.ハリディによって導入された。その理由は、馬が坂道を苦しそうに車を引いていくのをかわいそうに思ったからである。人々は最初、彼のアイデアを馬鹿にしたが、彼はあきらめなかった。そして車時代になったとき、一時議会でケーブルカー廃止の決議がなされたが、それを創意的な市民運動がくつがえすという史実にそった絵本が、V. R. バートンによって描かれていることは、前稿<sup>4)</sup>で述べたとおりである。そして、今日サンフランシスコのケーブルカーは、アメリカ全体の歴史的ランドマークの一つとなっている。

ケーブルカーからランバード通りという蛇行する坂道をのぞむことができる。スケートボードで遊ぶ子ども、二人乗り自転車で見物する人。絵を描く人等が外側に楽しい雰囲気ひろげているとともに、家々の内側からも、音楽を奏でたり、ダンスに興じたり、ネコが窓辺から表情をのぞかせたり等の暮らしの楽しさが伝わってくる。そうしたこの町の建物の内外の楽しい暮らしの宴の様子をケーブルカーの乗客は楽しむことができる。心ときめくような美しい色合と心優しい表現の中に、そのことがしっかりと伝わってくる。

#### 4-5 「視覚」(sight)から「洞察」(insight)へ

乗り物は子どもの生活世界に、たゆまず新しい世界を届けてくれる。それは「なんでもないもの」を「ほかでもないこのもの」という感覚にまで高めてくれる。「ほかでもないこのもの」の発見に驚き、感動することは、子ども自身の内面を変えることになる。現実のワクワクする移動体験、及び、それを表現している創造的絵本とじっくりつきあうことは、単なる目を向ける(looking)から、認知的な目による知覚(seeing)へと、子どもの、世界に向かう態度を変容させる。そうすることによって、主体は客観的世界の中に入っていく<sup>14)</sup>。

子どもと環境の相互作用を生き生きと促す交通生活世界を伝える絵本は、子どもの内側において、外界をみる「視覚」(sight)の力を、世界の意味を「洞察」(insight)する力へと変容させる可能性をはらんでいる。

5. 二つの自由をもたらす自転車

人間の身体的能力の束縛から自由にしてくれる乗り物の中で、自転車は、機械や他者に頼ることなく、自分自身の力で動かせるという特徴がある。即ち、自転車は、子どもが自由に乗り回せる乗り物である。

5-1 「はじめて自転車にのったとき…」

子どもと自転車のかかわりの表現は、絵本の中によく見られる。“I Meant to Tell You”<sup>15)</sup>では、父親がわが子の幼い頃の思い出を語りかけている中に、はじめて自転車にのれた状況をあざやかに示し得ている。

「はじめて自転車にのれたとき、どんどんスピードが増し、止まることができなかった。きみは止められずに丘の下まで走っていき、繁みのなかにつこんだ。繁みから出てきたとき、とっもおっかなそうだった。でもそのうちこわがらずにきみは走り続けられるようになった。ほくはとても誇らしい気持ちになった。」

水彩のシンプルなタッチの絵(Fig.16/グラビア3頁)が、この父子の生活物語の静かな感動を助長させてくれる。

5-2 「ほくじてんしゃにのれるんだ」

同じように、渡辺茂男作の『ほくじてんしゃにのれるんだ』<sup>16)</sup>(Fig.17)は、子どもが自転車に自分で乗れるようになったときの、満足感で胸をふくらませ、その喜びをほとぼらしせる様子が表現されている。とともに、子どものみならず、親も胸がいっぱいになることが伝えられている。

5-3 他者とのふれあい

絵本の中には、自転車が子どもの生活世界に多義的意味をはらむことを伝える画面が見られる。

例えば、すいすいと風が気持ちいいシーン<sup>17)</sup>(Fig.18/グラビア3頁)、家族ぐるみで買物に出かけるとき、うしろの荷台でお菓子を食べるおいしさ<sup>18)</sup>(Fig.19)、『ふたりはいっしょ』を地でいくタンDEM(二人乗り)自転車の楽しさ<sup>19)</sup>(Fig.20)等があげられる。

これらの絵の中には、自転車が他者(自然や人間)とのくつろいだふれあいをもたらす役割を果たすことが表されている。



Fig.17 「ほくじてんしゃにのれるんだ」  
満足感で胸をふくらませる



Fig.19 “How to Travel with Grownups”  
より、うしろの荷台でお菓子を食  
べるのはおいしいナ



Fig.20 「ふたりはいっしょ」  
二人乗り自転車の楽しさ

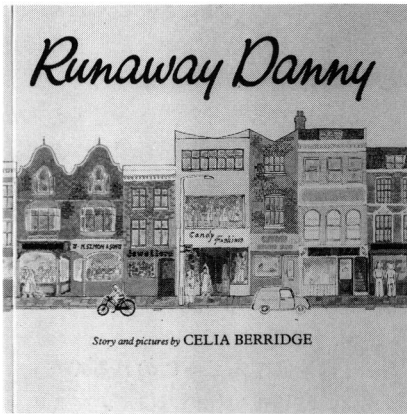


Fig.23 「ダニーの逃走」 田舎に行きたいダニーは自転車に乗って…

#### 5-4 「白い自転車」

子どもが自転車を他者（共感をよぶ存在）とみなす物語絵本がある（“The White Bicycle”（『白い自転車』Fig.21／グラビア3頁）<sup>20）</sup>。

ラビという男の子は、古い自転車を捨てようなんて思ってもいなかったが、母親があまりに汚くてボロボロだからといって、それは捨てられてしまう。

しかし、草むらの中のその自転車を拾う人があり、偶然の出来事が重なり、浮浪者、密漁者、パーティ帰りの人など、次から次へと多くの人々が、その自転車をうまく生かしてくれる（Fig.22／グラビア3頁）。

最後に、その自転車は自転車屋さんによってサビを落とされ美しく塗られ、少年の手元に戻ってくる。

オンボロ自転車は、だれかの眼にとまるたびに、「これはちょうど都合がいい」と言われて活用される。また最も使われるにふさわしい人に使われ帰属するようになるが、まるで自転車に生命があるように描かれている。古い乗り物をも生き長らえさせる感受性のこもった絵本である。

#### 5-5 「ダニーの逃走」

少年と自転車のかかわりの物語として見逃せないのが“Runaway Danny”（『ダニーの逃走』<sup>21）</sup>である（Fig.23）。

主人公の少年ダニーは、自然の多い田舎に住むことを夢みていたが、引っ越して来たのが大都市の団地。失望と新しい学校での淋しい思いから学校から逃走。逃走中に見つけた自転車であちこち移動するうちに、薄暗い路地のつきあたり、大きな門の間に、突然ダニーの目の前に田舎のシーンが飛び込んでき

た（Fig.24／グラビア4頁）。そこは一面の草っ原、池、鳥、緑……がいっぱい広がる公園。眼下に広がる景色はダニーの住む町であった。

翌日、ママといっしょに無断借用した自転車を肉屋さんのところに返しにいった。逃走した罰として、昨日の出来事を作文にしてみんなの前で読み上げるようになった。すると級友は次の土曜日その公園でフットボールをしようと言ってくれた。

自転車は、少年にとって行動的自由獲得の手段であるとともに、公園を田舎とみなす想像力をもたらすきっかけとなった。

#### 5-6 行動的自由と精神的自由

これらの自転車と子どものかかわりを描いた絵本を見てみると、自転車は、子どもに二つの自由を届けてくれることがわかる。

第一に、人間の身体的束縛を少しでも自由にしてくれ、かつ、子ども自らが自由に乗り回せる乗り物であること（行動的自由）。

第二に、そのことが、子どもの生活世界に意外な冒険的な出来事をもたらし、心の中の想像力の働きを高めてくれる。「想像力の働きは心の自由を表わす印である」（サルトル）といわれるが、まさに自転車は、子どもに心の自由をもたらしてくれるのである（精神的自由）。

人間は身体と心をもった存在である。自転車は、子どもの身体的行動ののびやかさと精神的世界の広がりをもたらすことによって、一人ひとり人間らしい存在を高めてくれる役割を果たす。

乗り物による移動は、世界の拡大であるが、自転車は子どもの自力の動きと自律的心の展開によって、子どもの生活世界を豊かに押し広げる可能性をもつ。

#### 6. トラブルをエネルギーにする

現代の乗り物は、騒音や事故や種々のトラブルを、子どもの暮らしの現場に持ち込む。それらを防ぐための物的対策、技術的対応の創意工夫の重要性はいうまでもないが、子どもの意識の中に、乗り物への共鳴関係やトラブルをエネルギーにするやわらかい視点を育てていくことも大切である。

そこで、トラブルをエネルギーにするものの見方や切口がうかがえる絵本をすくいあげてみよう。

#### 6-1 「街角の音楽」

“Street Music—City Poem”（『街角の音楽』Fig.25）<sup>22）</sup>には、都市の街路風景が数多く描かれている。雲に届かんばかりの摩天楼、公園での日曜コ

ンサート、交通渋滞の中でのタクシーの警笛……これらすべてが、都市で働き暮らす人々と都市活動のリズムの掛け合いをまるで祝福するかのように、詩的なことばと合わさって、一つのシンフォニーのように表現されている。

「バスの窓から」では、バスとバンの間にサンドイッチの肉のようにはさまれた自転車の人が、必死でペダルをこいでいる姿を見ることができる。

「ストリートミュージック」(Fig.26/グラビア4頁)では、街のすべての音が、相互にこすり合わさっている。バスのタイヤの音、タクシーの警笛、トラックのエンジンの音、道路掘削の音、頭上の飛行場の音、金属を引き裂くような音……この街のたゆまず発せられる騒音で、ぼくの耳はまるで戦いの激しい音で攻め立てられる、と騒音のボキャブラリーの凄まじさを表現しながら、最後の1行では「それがストリート・ミュージックだ」と言いきっている。

ここには、交通騒音をはじめとする都市のノイズを敵意をもってむかえるのではなく、音楽のように好意と共感をもってむかえようという、したたかさが表されていてたいへん興味深いものがある。

6-2 「芸術犬」

“Art Dog” (『芸術犬』Fig.27)<sup>23)</sup>は、奇想天外な物語絵本である。「ワンワン都市」(Dogopolis)の美術館の犬の守衛さんアーサーは、いつもは静かな暮らしをしているが、満月の夜だけは特別に変装して、街角に絵を描く。その絵には、しっぽの筆で“Art Dog”とサインをする。ある晩、美術館に泥棒が入り、レオナルド・ドッグピンチの作品が盗まれる。アーサーは、自分で「筆車」(Brushmobile)

をつくり、泥棒をつかまえに行く。しかし、泥棒に抵抗され、大トラブルに会うが、そこで機転をきかせて、それまでなぜか好きでなかったアンリ・マチスばりの絵を獅子奮迅の活躍で描き、3匹の泥棒犬を画面の中に封じ込めてしまう(Fig.28/グラビア4頁)。

ここでは乗り物は点景にすぎないが、美しい流線型の「筆車」というアイデアが面白い。とともに「困ったときには、トラブルをエンジンにして自分の得手で戦うべし」とは、住民主体の現代まちづくりにおける一つの鉄則であるが、こんな目覚ましい物語絵本の中で、そのことが示唆されていて心地よくなずけるものがある。

6-3 「友情の旅」

“The Friendship Trip” (『友情の旅』Fig.29)<sup>24)</sup>の主人公アーサーは、ある大都市の大きな駅で、毎日自分を訪ねてくる人を待ち続けていた。待てどくらすどビジターはあらわれなかったので、自分を訪ねてくる人は別の駅に来るに違いないと思い、別の駅に行く。そこで出会った人も同じように客人を待っていたが来ない。二人して別の都市へ移動する。各都市の各駅で同じようなことを繰り返しているうちに、駅の構内では待ちきれず、小さな街を埋めつくす程にたくさんの乗客が集まってしまう。

アーサーは、あるとき、一人ひとりを訪ねてくる人はいないが、ここに集まった人々はお互いに訪ねあうことができる友達同士だと気づく。その夜、すべての乗客でパーティを開き、それぞれが家に帰ったときにお互いを訪ねるプランをたてた(Fig.30/グラビア4頁)。

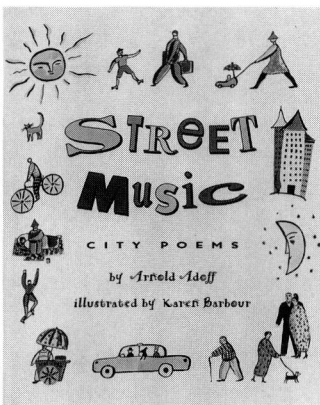


Fig.25 「街角の音楽」 都市の情景を詩的表現で表現する



Fig.27 「芸術犬」 美術館の守衛は満月の夜に変身する

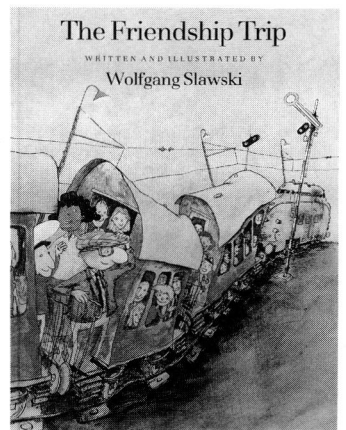


Fig.29 「友情の旅」 自分を訪ねてくる人を持つ人々は旅を続けるが…



ここには、現代社会の人と人の切断された状況を背景にしながら、列車や駅が人と人を結びあわせる機会をもたらすとともに、人の想像力によって、人の和を再創造できることが語られている。つめたい「無情の旅」をこえて、あたたかい「友情の旅」に向かおうという感受性の転位をみごとに示唆している物語絵本である。

#### 6-4 対立を融合する想像力

これらの絵本の中には共通して、カオス(混沌)を新しいコスモス(秩序)を生む源泉とみなす発想が息づいている。トラブルをエネルギーにして新しい状況を創造するダイナミズムがある。

マイナス事象をプラスにみたり、対立を融合へのシグナルとみる想像力の自由な働きは、子どもの交通生活におけるトラブルを乗り越えていく力となる。

### 7. 結び—子どもと交通の相互変容へ

本稿では、「事物」としての交通の見方を越えて、「他者」(共感を呼ぶ対象)としての見方を、内外の絵本の中にさがし求めてきた。その結果、四つのことが全体として明らかとなった。

#### 7-1 絵本が子どもの交通生活に寄与する効果

第一に、絵本には、絵と物語を通じて子どもと交通のかかわりあいへの共感の流れをもたらし、想像力を高める力がある。子どもが、自分と乗り物のかかわりの安全性や多面的効用について「気づき」を高めるのは、実際の生活の中での経験・身体を媒介とすることが基本であるが、絵本に触発された想像力を媒介にした洞察がそれを補ってくれる役割を果たす。

絵本の中に表現された生き生きとした交通生活世界の経験は、子どもの内側において、外界を見る「視覚」(sight)の力を、世界の意味を「洞察」(insight)する力へと変容する可能性をはらんでいる。

#### 7-2 共感を呼ぶ存在としての自転車

第二に、子どもにとって他者たりうる可能性をもっている最大の乗り物は自転車であること。

交通は、子どもの生活世界の拡大と縮小の両面をもたらす。高速交通による機械的な移動は、世界の拡大をきたすとともに、身近な環境との遊離、縮小、隠蔽を与える。しかし、自転車のような人力移動は、身の周りの宝物の発見や出来事に遭遇する機会をさずけ、身近な環境の拡大と顕現を生みだす。交通は、子どもの生活世界の拡大/縮小、顕現/隠蔽をもた

らす点で、両義的であり、本質的に両価的である。現代の高速道路の発達、子どもにとっての交通の両価性を著しく不均衡にさせる。積極的にこの不均衡を是正するために、人力によってゆっくり走る交通手段としての自転車が活用されるべきである。かつ、子どもが自転車を安心して乗りまわせるような環境整備が重要である。

自転車という子どもにとって身体的、精神的自由を与える力のある交通手段を見直し、再活性化することは、子どもの生活世界を豊かにするために重要である。

#### 7-3 モノ・ヒト・コト・ココロの全体的連関

第三に、子どもの交通生活の知識は、モノ・ヒト・コト・ココロの全体的連関としての生活世界の文脈の中でとらえられるべきであること。

子どもの交通生活における知識のありかたを、言語的、理論的、あるいは制度的次元からおさえるだけでなく、あくまで生活世界に生きている子どもと交通の多面的かかわり全体の中に位置づけて理解すべきであることが、全体を通していい得ると思う。

交通生活知識は、子どもの「身体との関係、行為との関係、そして他者との関係といったさまざまな関係を抜きにはとらえられなく」なってきたと考えられる。

#### 7-4 意味的世界を開く創作絵本

第四に、「他者」としての交通という見方を子どもの中に広げていくためには、夢想と現実の両面において、子ども自らが想像的体験行為を積み重ねていくことである。そのためには、交通と子どものかかわりの意味的世界を開く創作絵本が生まれることを期待したい。

そして、子どもと交通と、人間と環境が相互に変容の過程をゆるやかにたどるような、絵本のようなやわらかい現実の交通まちづくりの世界が広がってほしい。

#### 参考文献

- 1) 江原由美子『生活世界の社会学』勁草書房、P. 4、1985年、
- 2) 井上治子『想像力—ヒュームへの誘い』三一書房、P.297、1996年
- 3) 延藤安弘『こんな家に住みたい—絵本にみる住宅と都市』晶文社、1983年(広い意味での生活空間計画における絵本の意義を述べた。)
- 4) 延藤安弘「絵本にみる交通」IATSS Review

- Vol.17, No.3, 国際交通安全学会、pp.19~29、1991年
- 5) 前掲書1)、pp.11~12
  - 6) Sara Fanelli: My Map Book, Harpen Collias,1995 (England) /ほむらひろし訳『ちずのえほん』フレーベル館、1996年
  - 7) Barbara Preston: I Want to Cross the Road. Dinosaver Publications, 1978(England)
  - 8) 筒井頼子さく、林明子え『はじめてのおつかい』福音館書店、1976年 (日本)
  - 9) Mark Foreman: Sid The Kitten, Anderson Press, 1989 (England)
  - 10) Bernie & Mati Karlin: Night Ride, Simon & Schuster, 1988 (USA)
  - 11) Rovert Crowther: The Most Amazing Night Book—Packed with surprise! Viking, 1995(England)
  - 12) Donald Crews: Truck, Greenwillow Books, 1980 (USA)
  - 13) Elisa Kleven (illustrated), Tricia Brown (written):The City by the Bay — A Magical Journey Around San Francisco, Chronicle Books ,1993(USA)
  - 14) 京都大学文学部地理学教室編『空間・景観イメージ』地人書房、P.41、1983年
  - 15) James Stevenson : I Meant to Tell You, Greenwillow Books, 1996 (USA)
  - 16) わたなべしげお・さく、おかもとやすお・え『ぼくじてんしゃのれるんだ』あかね書房、1989年 (日本)
  - 17) 岡信子作、土田義晴絵『こぐまのまぐのなつやすみ』教室画劇、1993年 (日本)
  - 18) Elizabeth Bridgman, Eleawor Hazard (picture): How to Travel with Grownups, Thomas Y.Crowell, 1980 (USA)
  - 19) Arnold Lobel: Frog and Toad Together, Harper & Row, 1972(USA) /アーノルド・ローベル作、三木卓訳『ふたりはいっしょ』文化出版局、1972年
  - 20) Rob Lewis : The White Bicycle, Farrar Straws Girony, 1988 (England)
  - 21) Celia Berridge : Runaway Danny, Andre Dentsch, 1975 (Germany)
  - 22) Arnold Adoff : Street Music, Harper Collins 1995 (USA)
  - 23) Thacher Hurd: Art Dog, Harper Collins, 1996 (USA)
  - 24) Wolfgang Slawski: The Friendship Trip Nord—Sud Verlag, 1996 (Switzerland)
  - 25) 村田純一『知覚と生活世界—知の現象学現論』東京大学出版会、1995年